

# 私たちのウェディング・ベル

双子烏丸

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

本編より後、ヒロトとそして、晴れて彼と恋人同士になれた幼なじみヒナタとの恋愛模様と……その少し先までのお話になる読み切り短編です。

内容は約二万字程と幾らか長めなもの、一話完結になりますので良ければ！　ちなみに、挿絵も二枚程ついてます。

本作はpixivさんにも

[https://www.pixiv.net/novel/sho\\_w.php?id=16577498](https://www.pixiv.net/novel/sho_w.php?id=16577498)

第  
1  
話

目

次

1

# 第1話

今日は学校がお休みで。私は幼なじみのヒロトと二人で街に来ていたの。

小さい頃から一緒に、ガンプラやガンダム作品が好きな、私の大切な幼なじみ。……だけど今は。

「ヒナタ、今度はあっちの店とか行つてみないか？ 初めての所で気になるし、せつかくの君との……デートだから」  
街の通り沿いに寄つて、ちょっと一緒にデート。今日はヒロトの方から誘つてくれたんだ。

恋人として、二人でのデートなの。

——今はヒロトと幼馴染みだけじゃないの。大好きだつて告白して、彼もその想いを受け止めてくれたから——

ずっと前、ヒロトに想いを告白したの。おかげでこうして恋人同士になれて、結ばれたんだ……私達。

——今まで幼馴染としてのお出かけ、遊びに行つたりだつたけど、恋人ならデート……だもんね。  
ヒロトとずっと距離が近くなれて嬉しくて。同時にやつぱり、ドキドキで——

恋人同士になれてからもう大分時間も経つた感じで。でも、それでも私は今でもドキッとしているつて言うか。……だつてヒロトとこうしていられるのが、本当に満足でたまらないから。

「……うん。でもちよつと、くつつき過ぎかも」

「そうか？ これくらいなら普通だと思つたけど、もし恥ずかしいとかなら……」

「あつと、大丈夫。むしろ私も良い気持ちだから。……ちよつとだけドキドキするくらい、だから」

ヒロトは私のすぐそばでぴつたり、腕を組んでくつづいているんだ。そんな風にして街を歩いて、手を繋いでいるよりも密着している

感じで。

——やつぱり緊張しちゃうな。ヒロトとこうした関係になつてからしばらく経つけど、やつぱりまだドキドキしちゃうよ——手を繋ぐのだつたらまだしも、こうしてくつづいているのはなかなかないから。それに周りには他の人だつていて、視線もちよつと気になつたりも。……だけど

——でも嬉しいことは嬉しいんだ。ヒロトと一緒に、とつても——

こうして街を歩いていて、ふと横に見えた店のショーウィンドウの窓に映つた、私たちの姿。

腕を一緒に組んで並んでいる、そんな姿で。こうしている所を見ると、まるで。

「本当に仲睦まじいような、お似合いの一人だよね、私たち」

声に出して、ついそう言つてしまつた。ヒロトも、ショーウィンドウの方に視線を向けて笑顔を見せたの。

「多分、人からはこんな風に見えるんだな。

……ふふつ、確かにこうして見ると本当にお似合いだ、俺とヒナタは」

「そうかな、私たちつてやつぱりお似合いかな！」

そう言われると自分でも喜んでしまつて、つい笑顔になつちやうんだ。ショーウィンドウに反射して映つている自分の顔も笑顔で、それには。

——このショーウィンドウの中に飾つているのつて、ウエディングドレスだよね——

飾つてある純白の、とつても綺麗なウエディングドレス。私はそれにも視線が向いてしまつたの。

——いつか私も結婚して、真っ白なウエディングドレスを着て結婚式をするのかな——

そんなウエディングドレスを、つい立ち止まつて眺めていた。

たくさんの女の子の憧れ、夢だもんね。綺麗な花嫁衣装に身を包んでの結婚式、お嫁さんになる事つて。私だつて夢だから。……結婚

式を挙げる事も、それにお嫁さんになる事も。

——なれるかな……いつか。あんな風に綺麗な衣装で、一番大切な人と――

半分意識して、もう半分は無意識にヒロトの方に視線を向けた。  
……すると彼も同じようにウエディングドレス眺めていたんだ。  
「……」

横目に軽く見ていてるくらいだけど、でも何だか少し考えてもいる感じにも思えて。だけど私が今はヒロトの事を見ているとすぐに気づくと、こっちの方に微笑みかけて。

「このドレス、真っ白で綺麗だな。ウエディングドレス——花嫁衣裳とも言うんだろ？ 僕でもつい見惚れてしまう程だ」  
他愛のないような彼の言葉。……だけど私は、少し思つた事があつたんだ。

「あのね、ちよつとだけ聞いていい？」

「どうかしたのか。聞きたい事があるなら、何だつて構わない」

「ヒロトはこれから……将来の事をどうしたいって、あつたりする？」

進路や、就きたい仕事とか、それに……

でもその先の言葉は、何故か上手く出て来なくて、つまつてしまつた。とても大切な事だつて分かつているのに。

「将来の事とは、なかなか難しい質問だな」

ヒロトはちよつと困つたみたいに苦笑いで。もしかして変な事を聞いちゃつたかもつて思つたけど、彼は真剣に考えて答えてくれた。  
「――でも、俺は高校を卒業したら大学か専門学校に進学しようと思つてゐる。その方が就職で有利になるかも知れないから。……たゞどう言う学校に行きたいか、仕事をしたいのかはまだ決まつてない。三年に上がる頃には決めておきたいな」  
「やっぱり難しいよね、先の事なんて。私だつて分からなくて、はつきり決められないから」

「俺にとつてもヒナタにとつても、将来なんてまだ見えにくいものかもしれない。

だけど俺は少しだけだけ……決めている事もある」

でも、そう自信を持つて言うと、ヒロトは言葉を続けたの。

「大人になるからには、やっぱり良い仕事に就きたい。贅沢を言えばガンプラを続ける余裕があればいいし、安定して収入が良い所で働きたい。

その方がきっと俺や——いつか持つかげがえのない人との、家庭のためになるから」

「えつ…………それって」

今の中葉はどう言う事か、私は気になつた。だけどヒロトは少しだけはにかんだ様子を見せると。

「ちよつと、な。——でも今はこの時間を楽しもう。まだまだ、ヒナタと過ごしたい所があるからさ」

さつきの事は気になつたままだけど、今はタイミングじゃない……のかな。

「だね。今は私たち、デート中だから。やっぱり今こうしているのを、楽しまないとね」

だけどヒロトの言う通り、先の事より今のこの時間が大切だから。でも本当は——気になつていてるんだ。さつきの事、あとで聞いたりできるかな？

あれからも街中を巡つたり。

店やショッピングモールにも寄つたりして、小腹が空いたらカフェに行つたりも。デートの内容はあまり変わらないけど、でも私達の街は大きいから……場所は初めて行く場所や、久しぶりの場所が多くて新鮮味もあつたんだ。

ちなみに、今は——。

「今更だけど赤レンガ倉庫つて街でも歴史がある所なんだよね。明治時代に建てられて、それから使わっていたんだよね」

「ヒナタの言う通りだ。さすがに今では使われていなければ、それ

でもこうして史跡として……大事に残してあるんだよな。

よく観光客が来る名所なのも領ける」

赤レンガ倉庫にも久しぶりに行つてみたの。ヒロトと一緒にゆつくり歩いて眺めて、それから赤レンガ倉庫の中に建てられた、等身大のストライクガンダムの立像も。

「このガンダムも凄いよ。恰好良いのもだけど、あんなに大きいのに立つていられる事も」

「多分芯材が丈夫なんだろうな。実際あれだけのものを一本足で支えるのも、相当だろうし。……けどやっぱり良い。

等身大の初代ガンダムやユニコーンももちろん良いけれど、ストライクガンダムも好きだ。こうして見ると、まるでガンダムSEEDの世界にいるような感じになるから」

そう言つてから、ヒロトは軽くふつと笑うと。

「まあ、赤レンガ倉庫との組み合わせは、やっぱり違うかもしねないけどな」

「くすっ……かもね。でも私はこう言うのも、観光名所つて感じで好きかも」

私も彼につられてくすりと笑つてしまつ。こんな風にヒロトと過ごす事、やっぱり幸せだなつて。

もちろん前のように仲の良い幼馴染として、好きだつた彼の事を想つてゐるだけでも幸せで満足もしていた。でも、やっぱり。

「せつかくだから一緒に写真を撮ろう。——恋人として来た記念に、ここではまだヒナタと撮つていなかつたから」

そう言つて、ストライクガンダム像の前行こうと促すヒロト。

今こうして感じてゐる、ヒロトに誰より近い、『恋人』として私がいられる事。

もちろんヒロトだつてそんな風に思つてくれて……愛してくれてゐる。以前とはまた違う感じでも私を見ててくれて、想つてくれてゐるんだつて分かるから。

——やっぱり幼馴染だけだつた時よりも、心が満ち足りてるんだ。

ずっとただ傍にいるだけでも満足で、これ以上の幸せなんて長い間想像できなかつたし、望んでもいなかつたけれど――

だから今の私は、とても……そうとても。

――その想像出来ないくらいにずっと、ヒロトに告白して付き合つてからは、何だか幸福で満たされているって。

今のはそう感じるの。こうしていられるのが夢みたいな程に……そしてもつとヒロトと関係を深めたい、そんな私自身の心だつて芽生えているの――

ただ今まで通りで構わない――そうじやなくて、自分がどうしたいのか正直になれた事も。

何もかも、幸せでたまらないんだって。

赤レンガ倉庫に立つていてるストライクガンダムの前で立つ私たち。腕を組んだままで、ぴたつと私はヒロトの左傍にくつついて。彼は右腕を伸ばして、携帯正面のカメラレンズを自分達に向けると……。「準備はいいかな。こんなにも良い場所だから、俺達に笑顔で撮りたいな」

「うん。私も思いつきり笑顔で、一人で……一緒に！」

「――つと」

私は横から彼に軽く抱きついて、くつついてみたの。

そつとだけど、でも少し強く抱き寄せる感じで。もしかするとこのままくつついてしまいそうなくらいに。

「こうしても……構わないかな？」ヒロトが誰より傍にいるつて事、感じたいんだ。

一番近くで感じる体温や、胸の鼓動も……ヒロトの全部を

「ヒナタ――

数センチ程しかないくらいにある、ドキドキで少し赤面しているヒロトの顔。

それにちょっと癖毛氣味の彼の黒髪も額と頬に当たつてくすぐつた感じで。多分ヒロトと同じように、を感じているのかな。

体温とかも、彼の胸がドキドキと鳴っているのを感じている。私の事を思つて……強く鼓動しているつて、伝わるんだ。

「俺だつてドキドキしてしまうな。でもヒナタも同じくらい胸が高鳴つているのだつて、ちゃんと伝わつている。

GBNの世界も好きだけど、こうしてヒナタを感じていられるのは……やつぱりリアルがいい。直接ヒナタの事を感じられるのが、ずっといい」

そう言つてヒロトも私の身体を、左手で抱きおさえてくれたの。GBNでくつつく事も、今ではよくある事で。向こうでもリアルそつくりに感じられるけど、私も――。

「——私もリアルがいいよ。GBNは楽しい事が多いけど、生身で触れ合えるのは、現実だけだから。

だから今こうして強くヒロトを感じていられるのが……とつても良いの」

こうしていると、改めて分かるんだ。

……今更かもしれないけれど恋人になつてから一番変わつたのが、こうしてヒロトの方から来てくれる事がかなり多くなつた部分だと思うの。

——日常でもそうだけど、GBNでも、映画館や温泉旅行に行つた時だつてヒロトは私に……スキンシップと言うのかな、よくイチャイチヤしてくれたから――

前までは私の方からが殆どだつたのに、ヒロトは積極的に好意を示してくれる事が増えたんだ。言葉だつたり、行動だつたりでも。

彼を想つていてるだけだつた時でも確かに幸せだつたの。だけどこうしてヒロトも私に特別な想いを返して、向けてくれるのは。

「やつぱり私は、とつても――たまらないから!」

「ヒナタの今の笑顔、最高の笑顔だ。だから…………そのまま」

——パシヤツ、と。

そうシャッターを押す音が聞こえた。ヒロトは撮った写真を見て満足そうになると。

「うん、やっぱり良い笑顔だ。ヒナタにも見てほしい」

さつそく写真に満足している感じのヒロトは、私にもよく見えるよう携帯の画面を向けてくれる。どんな感じか見て見ると……私とヒロト、ストライクガンダムの前で一緒に並んで笑顔でいる写真で。「……本当だね。私って、こんな風に笑顔を浮かべているなんて、自分でもつい思っちゃうくらいに」

写真の中に映っている私は本当に良い笑顔で、ヒロトのすぐ近くに並んでいたの。

「だろ！ 僕だって君といふとこんなに笑う事が出来て、良い気持ちだ」

それに彼の笑顔も、とっても良かつたんだ。……二年前から心からの笑顔を見せる事はなかつたけど、エルドラでの事があつてヒロトもちゃんと笑うようになつたから。

写真でも、私こうしている彼の表情はそんな笑顔の中でも、とびきりな感じで。私の笑顔と負けないくらい。

「この写真も、それに今日の思い出も俺の宝物だ。デートでも——日常でも、ヒナタと過ごす時間は、全部。俺はもう忘れたりはしないから」

ヒロトから言われた言葉。それに凄く感激しちゃつて、また最高に笑顔になつてしまつて。

「私も、ずっとヒロトとの思い出は何より大切だもん！」

ヒロトも同じように思つてくれて、胸が一杯で……えへへ、つ「やつぱりヒナタの笑顔は、とても素敵だ。

ところでさ……良ければこれからG B Nに行つてみないか？」

そんなヒロトの提案。リアルでデートを満喫している時に少しきなりな感じもしたけど。

「私は大丈夫だよ、ヒロト」

だからこそ、ワタシはこう答えたんだ。ヒロトはほつと安心したよう、嬉しそうにもしながら笑つたの。

「良かった。せつかくリアルでのデートの最中だつたから、もしかしたら嫌じやないかつて心配でさ」

「ううん。G B Nだつて楽しいし、素敵な場所は沢山だから。全然悪くないつて思うもん」

「ありがとう。——きっと、後悔はさせたりしない」

「？」

最後の言葉はちょっと気にはなりはしたけど、でも今は置いていいかな。

そう言うことで私たち二人はG B Nに。ここからだと、G B Nにログイン出来るガンダムベースも近いから。

一緒に来たG B N。私達はエリアを移動して、少しメルヘンチックでもある近未来の街に来ていたの。

草木や自然に調和している所で、ダイバーの人たち以外にも、この街の住民っぽいSDのジムさんとかみみたいなロボットがちらほら見えて、街の建物もSF的な感じだけど全体的に曲線的で柔らかいイメージで、ファンタジー的な部分を感じるんだ。

何だか街全体が都市と言うより、芸術みたいな……そんな街。

「人とロボットが共存する街、ネオトピア。SDガンダムフォースと言ふ作品の舞台だ、良い街だろヒナタ？」

ネオトピアと言う街、その景色がよく見える草原の間の小道を渡る私とヒロト。眺める街景色も、周囲に広がる新緑色の絨毯のような草原も良いし……草原をざわめかせて波打たせる優しい風も心地がいいの。

「何だかメルヘンっぽい街……だよね。そのガンダムフォース、だけ。作品はあまり知らないけど雰囲気は大好きだよ。

ねえ、良かつたら後で教えて欲しいな」

「ガンダムフォースか？ いいとも、今度家に遊びに来た時に色々教えるよ。それにDVDもあるから二人で観よう、ヒナタもきっと気に

入るアニメだと思う」

「今からでも、何だかとつても楽しみだな。ならその時に沢山教えてね」

「もちろん。……裏設定はちょっとシビアな面もあるけれど、アニメでもここ、ネオトピアが良い街であるのは間違いない。ほら、やつぱりここから見える——ネオトピアタワーはあんなにはつきりと。

さすが、ネオトピアの名物だな」

私はヒロトと、街向こうに見える一本の高い塔を眺めるの。まるで大樹のように枝分かれして、その先には丸い庭園がある独特だけど、芸術的な塔。

「うん、とつてもいいな。

ヒロト、今日も素敵な所に連れて来て……ありがとう」  
そうお礼を言うと彼は得意げに、清々しく笑ったの。

それからヒロトに連れられてネオトピアの、今度は都市部に。

——今度はここで一緒に買い物かな？ 何だか面白そうな物もありそうだから、ワクワクかも——

私はそんな風に期待してたんだ。そうして都市部の中にある、公園に立ち寄った所で……。

「ヒナタ、実はお願ひ事があるんだが、構わないか？」

そんなヒロトからの言葉。ちょっと意外な気はしたけど私はうんつて答えた。

「良いけど、どうしたの？」

「少し言いにくい事だけど、しばらくの間……ここで待っていて欲しい。ここからは一人で行動させてくれないか？」

「」

ここでヒロトとお別れだなんて、びっくりしたって言うか、ちょっとだけショックかもで。

「ごめん。やっぱリショックだと思うけど、ちゃんと戻つて来るから。  
だから——」

「ううん、いいよ。本当はちょっと寂しいけど……だってヒロトが言う事だもん、何か大切な事だつて思うから」

寂しいのはそうかもしれないけど、ヒロトもヒロトで何かあるからだから。だから私はこう答えたの。

彼は申し訳なさそうにしている感じだけど、でも返事は優しく返してくれた。

「ありがとう。……少しだけだから、どうか待つていて欲しい」

ヒロトはもう一度、ごめんと謝るような感じで言うと、私に手を振つて去つて行つたの。私も同じように手を振つて彼を見送つて……でも。

——やっぱり、こう言うの寂しいな——

ヒロトはネオトピアの街に一人行つてしまつて、私は公園のベンチに座つて戻つて来るのを待つてゐる。

「あっ、鳥だね」

ぼんやり傍の大きな木を眺めると、その木の幹に白い鳥が留まつているのが見えた。ここは空気がいいし、天気もいいから。何だか朗らかな気分になれるんだ。だけど……。

「……ヒロト、会いたいな。」

こうして、ヒロトがいないのつて……やっぱり寂しいなつて。

恋人として付き合つて、前よりも彼との距離も親密になつて私も気づいたんだ。ヒロトの存在つて、やっぱり私にとつてずっと大きいんだつて。

まだ幼馴染みだつた頃だつたら私の傍にいなくても、見守つてゐるだけでも良かつたけど。でも今は——付き合つて、こうしてヒロトと居られるのが、想つてつてもらえるのが前よりもつと幸せだつて感じつて。だけど…………。

——ヒロトと一緒にいてずっと幸せになつた分、こうしていなくなつた時には……逆に、ずっと寂しくなつてしまふ事もあるんだ——

ううん、少し違うかも。

本当はヒロトの事を昔から好きでいたから。幼い頃から頼りになつて、優しい私のヒーローを。最初は憧れただけど、いつからか誰より好きな人つて気持ちになつて。だからヒロトから貰つたものは全部、大切にしているんだ。——あの頃の事、彼の方はどうだけ覚えているか分からぬけど、でも私はあの頃からずっと想つていたから。

だから何処かで望んでいたと思うの。いつかヒロトが私を選んでくれたら、両想いになれて結ばれたい、想つてもらいたいって。それが叶つたから、こんなに満ち足りて幸せなんだと思うから。そして……寂しくなるのは。

公園の木の幹に留まつていた白い鳥。私が見ている前で鳥は翼をはためかせて、空に飛び立つて行つたの。

さつきまでいた木は目もくれずに、そのまま青い——空の果てに。綺麗だつて思つた。でも同時に……胸がぎゅっと強く締め付けられるくらいに苦しく、悲しく思えて。

——もしかすると、いつかヒロトの思いが変わつてしまふかも。私の前からいなくなるかもしづれないって、そう思つてしまふから。

やつと手に入つた二人でいる幸せがなくなるのが、怖いんだよ——

ヒロトは優しい人だつて分かるから。けど、たまに自信がなくなつて不安になるの。

やつぱり私とこうして付き合つてゐるのも無理してゐるかもつて、だからいつか……離れて行つてしまふかもしづないと。

——イヴさん。前にヒロトから話で聞いた、GBNで出会つた大切な人。あの人の存在は、ずっと大きいと思うから。

もしもイヴさんが今でも生きていたら、多分——

ヒロトには二年前に出会つてGBNで大切な思い出を作つた人……ELダイバーのイヴさんがいたの。だけどGBNを守るために彼女はいなくなつてしまつて、それから長い間ヒロトは苦しんでいた

んだ。それだけ彼にとつてかけがえのない人だったから。

——本当は、多分ヒロトの一番傍にいるのは私じゃなくて、そのイヴさんなんだつて。いなくなつた今でも、彼はイヴさんの事を忘れないといふと思うから。

だから、もしかすると、本当は今ヒロトとこうしているのが間違いだと——いつかそうなるかもしれないのが怖くて。そうなつた時に私の傍から彼がいなくなるかもしれない、別の誰かの所に行つてしまふかも知れないと、そう思つたりも。

……時々、ヒロトがいない時にそう考へてしまつて、たまらなくなつてしまふから。

---

「お待たせ、ヒナタ。待たせてすまない」

そうして待つてしばらくすると、街の方からヒロトが戻つて來たの。ほつと一安心して、私は呟いてしまつた。

「……良かつた、ヒロトが戻つて来てくれて」

「あれ？ 何か言つたか？」

「ううん。なんでも、ないよ」

今呟いたのは、本当に大した事じやないから。

——私つてば心配性かも、せつかくヒロトとこうしていられるのに変な事を考へてしまふなんて。でも、何だろう——

今ヒロトと居られるのは嬉しいけど、まださつき思つていた事が少しだけ残つていた。心配したつて……どうにもならないのに。

「一人で寂しい思いをさせたかもしれない。けど、せつかくだから秘密にしておきたかった。

……これからヒナタと行こうと思つてゐる所と関係があるものだから

「？」

不思議な事を言うヒロト。彼の様子も、どうしてかドキドキと緊張しているみたいで。

そんな風になるような事つてあつたかな？ 私はよく分からなくて変な気持ちになる。

「よく分からなかな？ けどすぐに分つてくれると思う。だから――今からまた一緒に来て欲しい。

それが今日ヒナタとG B Nに来た、一番の目的だから  
真つすぐと向けられるヒロトの目。どこに行くのか分からないうけ  
ど、でも真剣な感じなのは分かるから。

「いいよヒロト。ならこれから一人でそこに、行こう！」

それにしばらく一人で待っていたから、ヒロトとまた何処かに行けるのも嬉しいの。だから今はどこでだつていいの、彼と一緒になら。「良かつた、俺も安心だ。場所はネオトピアのエリア内で、ここからでも歩いて行けるくらい近い。

……けれどあと一つ頼み事がある。大したことでは無いと思うから、良ければ聞いてくれないか。さつきみたいに一人にさせるわけでもないから」

またヒロトからのお願い事。気になつたけど、もう一人で待たせることは無いつて言つてたから。それならいいかなつて思つたの。

「ヒロトがそう言うなら。今度はどんな、お願ひかな？」

「続けて二度もすまない。頼む、その場所に着くまでは少しだけ――」

---

私はヒロトに手を引かれて、どこかを歩いていたの。

「今歩いているのは、どんな所だろう？」

「こゝは森の中の一本道。ネオトピアで言えば外れの場所で、周りにいるのは俺とヒナタだけだ」

「そつか、森の中を歩いているんだね。…………つとと」

歩いていると足元でつまづいて、つい転びそうになる。だけどヒロトが私を、その前に受け止めてくれた。

「ありがと。おかげで、転ばなくて済んだよ」

「礼には及ばないさ。何しろ……俺の頼みでヒナタには目を閉じてもらっているせいだから」

ヒロトの言う通り、実はここまで来るまでの間ずっと、目を閉じたまま歩いて来てたんだ。おかげで何も見えなくて、彼が優しく手を引いて案内しているから、歩いて進めるの。

「見えないで歩くのは大変だと思う。でも、もう後少しだからそれで我慢して欲しい」

「うん。ヒロトはどこに連れて行つてくれるのかな……楽しみ」

真っ暗だけど、こんなにワクワクするのは不思議な気分。

そうしてヒロトと歩いて、握っている彼の手も……頼もしく思えるの。

ヒロトの言うには森の中。その道を目を閉じて歩いて、しばらく経つたくらいに。

さつきまで歩いていた彼が足を止めた。それから私に、こう言つたの。

「ヒナタ、もう目を開けても大丈夫だ」

そつと、優しく言つてくれたヒロト。

ようやく着いたみたい。でも何処なんだろう？　ずっと目を閉じて連れて来られた場所、何だか緊張しちゃつて。

「どうしたんだ？　まだ目をつむつたままで、何かあつたか？」

「あはは、ちょっと緊張でドキドキしちやつて、期待で逆に目を開けるのが怖くて」

私の言葉に、彼はちょっと可笑しそうな笑い声をこぼしたのが聞こえた。

「期待してくれて光榮だ。けど、俺はヒナタに見て貰いたいたくてここに来た。だから……目を開けて欲しいんだ」

ヒロトだつて私を想つて連れて来てくれたんだ。だから、ちゃんとしないと。

「うん。ならゆつくり、目を開けるね」

緊張しながら、私はそつと目を開けるんだ。

ようやく見た外の景色、目の前にある場所に私は……とくんと胸が高鳴つたの。だつて……。

「ねえヒロト、こゝつて——教会だよね」

ヒロトが連れて来てくれた場所、そこは真っ白で小さな、森の中の教会だったの。

上には十字架があつて三角屋根、ステンドグラスもあつて……教会のイメージそのままの建物が、私の目の前に。

「その通り。こゝはネオトピアの森にある教会で、隠しスポット的な場所なんだ。

小さいけど、可愛い建物だと思う。それに他に来る人も殆どいないから、ヒナタと過ごすのも良い所で……何より」

ヒロトは私の前に来て、教会を後ろにして正面から真剣に見つめる。そして、まるで告白の時のような雰囲気で、彼は言つたんだ。「教会に君と来たかつた。俺とヒナタ——一人だけの結婚式を、GBNでしたかつたから」

「——え？」

私との、結婚式つて。そう言葉で言われて一瞬何が何だか分からなくなってしまう。

「もちろん本当の結婚式ではないけれど、GBNだからこそ出来る事だと思う。こうした形で俺の想いを伝える事が」

ヒロトから言われはしたけど、でも、まだよく分かつていなかつたの。

「あはは……でも結婚式だなんて、大袈裟だよ。それにいきなり過ぎてビックリで、私……」

ヒロトとの結婚式、もちろん私にとつては凄く喜ぶべき事なんだ。だけど……いきなり結婚式なんてビックリ過ぎで、戸惑つて。

「驚かせ過ぎたかもしれないな。けど、ヒナタに何かもつと伝えられたらつて、俺なりにずつと考えてはいたから。

この関係になつてしまやすく経つた、だからこそ君に伝えたかつた。ヒナタの恋人として今出来る一番の想いを」

だけどそう言う彼も、私と同じように緊張している感じで。それで

も真っすぐ私を見てくれている。

そんなヒロトの眼差しが——とても。

「それで、リアルでのデートで純白のウェディングドレスを見た時に、思いついたんだ。ヒナタの花嫁姿を見てみたい、君と……結婚式をG BNとしてみたいと。

どうだろうか？ ヒナタ、もし気に入つてくれたら……俺は」少し緊張しながら、彼は聞いたの。確かに驚いてしまったけど、私の答えはもちろん、一つに決まっているよ。

「どつても、嬉しいよ！ ヒロトとの結婚式——まるで夢みたい！」

ヒロトは喜んでいる私を見て安心したみたいで、それから笑顔を見せて優しく私の手をとつたの。

「……喜んでくれて、本当に良かった。ごっこかもしれないけど、教会も、それに色々と用意もしてきたから。

少し早い、二人きりの結婚式を始めよう」

私達が入つた教会。

左右には椅子が幾つも並んでいて、真ん中の赤いカーペットの先の奥には小さな祭壇があつて……普通ならあそこに神父さんがいて祈りを捧げたりするんだろうな。

それに、今――

「お待たせ……似合うかな？」

「」

私はヒロトが買つてくれたウエディングドレスに着替えて、彼に姿をお披露目したの。

——さつきネオトピアの街に一人で行つたのも、ウエディングドレスを買いに行つてたからなんだつて。待つていたのは寂しかつたけど、この為だつて分かつたから。……それも嬉しくて。

「ボーッとして、どうかした？ セつかくのウエディングドレス、ヒロトに綺麗だつて――言つて欲しいな」

ヒロトが用意してくれた――純白のウエディングドレス。それは

リアルでデートした時にヒロトと見たドレスとそつくりで、まるで花のようひらひらした、綺麗で可愛い花嫁衣裳なの。

こうしてウエディングドレスを着ている私……自分でも本当に夢みたいな

「ヒナタの花嫁姿か。想像はしていたけど、それよりもずっと」「うん？」

私の姿を見て、ヒロトは何か言おうとしたけど小さい声で、あまり聞き取れなかつた。もう一声聞き直すと、彼は顔を赤くしながら……応えてくれた。

「ずっと綺麗で、それに最高に可愛い……俺の花嫁だ、ヒナタは」

そう言つてくれた言葉、私はもちろん――。

「――幸せだな、花嫁衣裳になれたのも、褒めてくれた事だつて、すぐ！」

それに……ヒロトもタキシード姿で。こうして揃えてくれるなんて

ヒロトははにかんだ表情を、ちよつとだけ浮かべていたの。彼も今は、白いタキシードに……着替えていて。ウエディングドレスとタキシード、花嫁と——花婿さん、本当の結婚式みたい。

「そう、か？ せつかくだからお揃いが良いと思つて俺もタキシードを買ってみた。ここまでぴしつといたのは慣れてなくて、本当に似合つてるだろうか？」

少しきついみたいで、襟元を軽く引っ張つて広げながら彼は言った。の。そんなの、決まつているじゃない。

「どつても似合つているよ！ タキシードを着てているヒロトも、凄く恰好いいから。

さすが私のヒーローだね！」

だつて初めて見るから。白くてぴしつとしたタキシードを着た、ヒロトの姿。私の方こそ素敵で見とれてしまうくらいだから。そして彼は私の誉め言葉に、喜んでくれたはにかみ顔を見せてくれた。

「ありがとう、ヒナタ。だけどヒーローと言うのは、少し違う」「えつ？」

そつと、ヒロトは右横に並んで、手を差し伸べてくれた。

「今、俺はヒナタの——立派な花婿だ」

そう言つて向けてくれた、今度は頬もしい笑顔。私は……とにかく胸が高鳴つて。

「——うん。私も、今日はヒロトの花嫁さんで。……本当に、いいんだよね」

ドキドキしながら改めて聞いてみたの。ヒロトはそんな私に、もちろんつて答えてくれた。

「当然だ。ヒナタだからこそ、俺はこうしたいから」

そう言葉を交わして、教会の中では私たちは二人で、手と手を繋ぐの。

嬉しいな——こうして。

ウエディングドレス姿の私と、そしてタキシードを着たヒロトと、二人で並んで教会の祭壇に続く赤いカーペット……バージンロードの上をゆっくりと歩いてゆく。

「最初は新郎新婦の入場、だよね。こうして二人で並んで、ゆっくり歩いて行くの」

衣装も着替えて、結婚式を始めた私とヒロト。

本当の結婚式みたいにバージンロードを歩きながら、すぐ傍の彼の横顔を私は眺めた。

「本当なら……音楽だとか、俺達の結婚式に来てくれた沢山の人が出迎えてくれるんだろうな。

けれどヒナタと二人でするのも、とてもいい」

「うん。私達だけの、結婚式だもん」

だけどちょっと想像してみるんだ。

本当の結婚式はどんな感じだろうつて、きっとヒロトの言うように綺麗な音楽が流れて、多くの人が拍手で出迎えてくれてお祝いしてくれるんだ。

——お友達や親せきの人たちもそうだけど、私とヒロトのお母さん

やお父さんも。その時には、喜んでくれるかな——

「ヒナタに聞いてほしい。

今はまだ違うけれど、俺が大人になつた……その時には、今度は本当の結婚式をしたい」

歩きながら、ふと彼がこんな事を言つたの。私はいきなりの告白にどきつと、ちょっとうつむいてしまう。

「——そう、なの？」

うつむいたのはヒロトの顔が、つい見るのが気恥ずかしくなつてしまつたから。だけど彼は自信を持つて続けてくれた。

「もちろんだ。でないと、こんな事は君と出来ないから。

きっと……大人になつたら同じように、今度はリアルで。今は真似事かもしけないけど、同時にいつかの本番前の一リハーサルみたいなもので」

私は勇気を出して顔を上げると、そこには優しい表情をした彼が見つめ返してくれていた。

「これが俺の願いだ。本当の結婚は先かもしれない。気が早いかもしれないけれど、将来は立派な大人になつてヒナタと結ばれて、一緒に素敵な家庭を築きたい。

だから、もし同じ思いでいてくれたら……凄く嬉しい」  
嬉しいって、ヒロトは言つてくれた。だけど私だつてもつと、ずっと——嬉しいんだよ。

「もちろんだよ。恥ずかしくて言い出せなかつたけど、本当はね、お嫁さんになりたいって……心から思つてたの。

デートでウェディングドレスを見た時も、あんな風に白い花嫁衣装で、一番大切に想つている人と——こうして

朗らかな顔になつた私は、得意げにそんな表情を彼に向けたの。「そんなヒロトのお嫁さんに。……私も夢に思つてたから！」

そうしてバージンロードの先、私たち二人は祭壇の前に辿り着いたんだ。

私と、ヒロト。互いに向かい合つて……。

「……」まで、ようやく来れた

「……うん」

実際だつたら神父さんがここにいたりなんだろうけど。彼も  
ちよつと緊張しながら、言つたの。

「神父さまもいなけれど、ここで俺達は——互いに誓いの言葉を言  
おう」「

誓いの言葉、みんなの前でお互いの愛を誓う、そんな大切な言葉で。  
「私たちの、告白だよね。本当なら沢山の人の前で。その時になつた  
ら、ちゃんと言えるかな？」

少し心配になつたけど、ヒロトは両手をそつと優しく、私の肩に置  
いてはげましてくれたの。

「言えるさ、ヒナタなら。その時にはきっと」

「そうかな？…………だつたらいいな、私」

「だからこそ今、こうして結婚式をしているのもあるから。まずはこ  
こで、一緒にやつてみよう」

まだちよつと心配な私に、彼は微笑みかけて一步、二歩、近くに寄つ  
てくれたんだ。互いにすぐ傍までの距離でそして、改まつて真面目な  
表情で、口を開いたんだ。

「まずは、俺から誓いの言葉を言わせてくれないか。

俺は——クガ・ヒロトはムカイ・ヒナタをこれから先、病める時も、  
健やかなる時も、生涯愛し続ける事をここに誓う

結婚式でイメージする誓いの言葉。

……本当に、ヒロトは私にこう言つてくれたの。それに彼は、今度  
は真面目な表情を優しく緩めて、続けてくれた。

「……結婚してないから、まだ妻としてではないけれど。だけど俺が  
愛していると言う想いは本気だ。——誰よりも、ヒナタを」  
「そうなの……ヒロト？」

「——ああ。

長い間、ヒナタとの思い出も、いつも君がいるのをどこか当たり前  
に思つてしまつた。だから君の事より、別の事ばかり優先していた

所もあつた。……どこかで寂しい思いをさせてしまった。

だけど、今はヒナタと過ごした日常や、それに君の想いがどれだけ大切だつて気が付いたから。……過去の事は過去で、もちろん大事な物だとは思う。だけどその面影を追うのは、もう止めた

ヒロトが言つたのと同時だつたの。彼はドレス姿の私の身体を両手で引き寄せて、抱きしめた。

優しくだけど、強く私を……抱いてくれて。

「これから先はずつとヒナタの、誰より傍にいたいから。離れたりなんてしない、同じように……いや、それ以上に君の事を想う。

俺はヒナタと幸せになりたい。一生かけて君を——幸せにしたい。それが俺の誓いの言葉だ」

……心のどこかで怖く思つていた。いつかヒロトの想いが変わつてしまふかもしない、そして、私の前からいなくなるかもつて。だけど彼は誓いの言葉を、ずっと傍にいたいと、一生幸せにした  
いつて言つてくれたから。

「ヒロト、本当に……そう誓つてくれるの？」

凄くドキドキ、半分期待して……半分怖く思いながら私は聞いた。そんな私にヒロトは、安心させるように優しく応えてくれた。

「——ああ。長い間傍にいたのに、遅くなつてしまつた答えだけれど、心に決めた事だ。今度は前の告白よりも大事な事だからこそ伝えたかつた。

もちろん何度も誓う。ヒナタ、俺はこの先もずっと愛している  
……君と一緒に

そう言つて——くれたんだ。

ヒロトがこんなに想つていてくれた。私は、心の中がはち切れそうになつて。

「おつと」

今度は私からもヒロトを、ぎゅっと抱きしめたの。

「ふふふ。ヒナタがこんなに強く抱きしめるなんて、驚いた」

彼の肩に顔をうずめたまま。私は今、自分の想いを正直に……言葉

にする。

「当たり前だよ。だつて、あんなに誓つてくれたから。

……本当はね、私もヒロトがもしそう想つてくれたらつて、きつと何処かで願つていたから。だから、今胸の中がこんなに暖かくて、自分でも凄く喜んでいるんだつて……分かるの」

しばらく互いに抱き合つたままで。

そして、満足してからそれぞれ手を離して、また見つめ合うの。

「俺の想い、これでヒナタに伝えられただろうか？」

「うん。とつても——それに」

私はヒロトに、こう続けたんだ

「今度は私も誓つていい？ だつてまだ、言つてなかつたから」

「大丈夫だ。ヒナタからの言葉も、俺は聞きたい」

彼の言葉に安心して、一息ついてから私は……誓いの言葉を。

「私——ムカイ・ヒナタもクガ・ヒロトをこれからも、どんな時でも一生愛して支えると、ここに誓います」

ヒロトに言えた誓いの言葉、自分でもそれが言えたのが嬉しくて、だからつい思いつきり笑つてしまふ。

「……やつと言えたよ。この言葉が言えて、とても幸せな気分なの。

だつてヒロトの事、ずっと、ずっと愛していたから！」

私の言葉に彼は微笑んだの。そしてポケットから黒い小箱を取り出してみせて。

「ドレスもだけど——君のためにこれも用意した。結婚式にはきっと欠かせない物だ……互いに愛し合う、二人にとつても」

開けた小箱の中にはきらりと輝いている指輪が二つ。それは結婚指輪だつて、すぐに分つたの。私は——感激しちやつて。

「指輪まで、こうして持つて来てくれたんだ！」

「そんなに喜んで貰えると、俺も嬉しい。……G B Nでこんな風に結婚式をするのは俺にとつても特別だから、指輪も一緒にと思つた」

話しながらヒロトは小箱を祭壇に置いて、中から指輪を一つ、そつと手にとつたの。

「ヒナタ、左手を出してくれないか。指輪は直接渡すものだから」

「うん——お願い、ヒロト」

自分でも胸が高鳴るのを感じながら、私は彼に左手を差し出した。

「こうして見るとヒナタの手や指、すらりとして……綺麗だ」

「何だか照れちゃうよ。こんな風にヒロトが言うなんて。でも、とつても良い気持ち」

「光榮だよ。じゃあ指に、そのまま」

ヒロトは左手をそつと添えて、右手で丁寧に私の薬指に指輪を、はめたの。

「——わあ」

薬指できらきらと輝いている、ヒロトからの結婚指輪。自分の指にこうして彼との指輪を付けているなんて、そう考えただけで嬉しくて、幸せで……喜びで一杯で。

「そこまで喜んでくれるなんて、見ていて俺まで、気持ちが良いくらいだ」

「当たり前だよ。だってヒロトからの、結婚指輪だもん。喜んで——当たり前だから」

「本当にヒナタは……俺の事を」

「そう言うとヒロトも笑顔で、そして——」。

「今度はヒナタが俺の指に、指輪をはめてくれないだろうか？ 同じように君の手で」

さつきの私のように、手を差し伸ばすヒロト。

もちろん。私は祭壇に置いてあつた小箱、そこに残っていたもう一つの指輪を手にとつた。それから優しく……でもちよつとドキドキしながら私は、ヒロトの指に結婚指輪をはめたんだ。

「」

私と同じ指輪をはめた、彼の左手の薬指。その手を目の前に持つて来て、ヒロトは自分でもよく眺めて……それから表情を緩めたの。

「自分でも……よく似合うと思う。俺と、そしてヒナタだけの大好きな

「うん。私たち二人の、大事な。この指輪はGBNでの、きっと宝物だから」

「これで一人でお揃いだね。それに、こうした後は……きっと。

「——ヒロト」

私の方から、両手をヒロトの首後ろに回して、彼を抱き寄せた。「指輪だって交換したから、後はこれだよね。……誓いの口づけ、それも一緒にしたいの」

自分でもちよつと強引かもって思つたけど。でもこの今だから、想いを一杯に伝えたかったの。

ヒロトは、私の想いに真摯に応えてくれた。

「もちろん。一人の想いを伝え合う、結婚式で一番の事だから。そして……俺にとつても」

彼とそして私、結婚式の誓いの口づけをしようと、一番に想いを伝え合おうとするの。

そして口づけする前に私は、もう一度ヒロトに告白するんだ。

「ヒロト、これからもずっと一緒に……いようね

私の言葉にヒロトもすぐ目の前で、優しい眼差しで見つめ返してくれて。

「ああ。——約束だ」

その言葉が聞けて、良かつた。

とても幸せな思いを胸の奥にに感じながら。私は愛しているつて気持ちを、口づけでヒロトに伝えたんだ。

本当に幸福感で満ち足りた、そんな瞬間で。

「ん——つ」

まだ眠気が残っている中、私はベッドで目を覚ました。目をこすりながら、起きたばかりの頭をはつきりさせて。

——ちょっとだけ眠いかも。でも気持ち良く、眠れたな。とつても睡眠もだけど、眠っている間に見た……夢も。その事を思い出しながら私は、左手の薬指にはまっている婚約指輪を眺めて、一人微笑んだ。

それから、一緒のベッドでまだ眠っているヒロトにも。

「……ふふつ」

こつちに向けて気持ちよさそうに眠っている彼の寝顔。見ていて何だか、ほっこりするの。

——でも起こすのは悪いよね。せっかく、こんなに気持ち良さそうに寝ているもん——

だから、私はヒロトを起こさないようにゆっくりベッドから降りて、朝の支度をしに行くんだ。

朝起きた私は着替えて、朝支度を整えている所。

今はキツチンで、私は朝食を作っている最中で。

——卵焼きは、やつぱり朝ごはんの定番だよね。それに温かいお味噌汁も欠かせないもの——

こうして料理するのも楽しいの。私とヒロトの朝ごはんをこうして、今は——二人分の。

それに今日は彼がお仕事だから、お弁当も先に作つたんだ。傍のテーブルにはそのお弁当箱も。もちろん、腕によりをかけて愛情もたっぷり込めた……お弁当。ヒロトがお腹空いても大丈夫なように、沢山作つたの。

——お弁当も美味しく食べてくれたら、嬉しいな——

私が作つたお弁当、ヒロトはいつも全部食べててくれて、帰つて来たら美味しかつたつて伝えてくれるの。昨日のお弁当の時には、和風ハンバーグがお気に入りだつて言つてくれたつけ。

「おはよう、ヒナタ」

そうしていると、いきなり後ろから声がした。振り返るとすぐそこにヒロトがいて……驚いたやつたんだ。

「あつ!? おはよう! 早起きで驚いた」

「驚かせてごめん。つい、キッチンから良い匂いがしたから起きてしまった」

「……なら謝るのは私だよ。せっかく寝ていたのに、起こしちゃつたから」

あはは……料理の匂いで起こしちゃうなんて。だけどヒロトは気にならない様子で、傍に来てそつと身体を抱き寄せてくれたの。

朝から彼とくつついて、何だかドキドキだな。

「そんな事ない。むしろ今日の料理当番は俺なのに、作ってくれて感謝している。

俺より先に起きて……その、申し訳ない」

そう言つて少しばつが悪い様子のヒロトだったけど、私はゆっくり首を横に振つて、彼に微笑むの。

「ううん。今日は私が、そうしたいって思つたから。

いつもより早起きして、支度をして。その方が……少しでもヒロトと一緒にいられるから」

「——ヒナタ」

「それには、ほら、もうすぐ朝ごはんも出来るから一緒に食べよう。私はヒロトと過ごす時間が一番、大好きだから」

もうご飯が出来るから。だから今日も……一緒に、ね。

それから朝ごはんを用意して、ヒロトと一緒に食べる私。

ニュースの事や最近の事、他愛のない話をしながらの時間。心地が良いんだ。

「うん、やっぱりヒナタが作る朝ごはんはとても美味しい。この卵焼きは……もしかしてだし巻き卵か?」

「正解! 使つただしもこの前スーパーで売つていたから。だからチャレンジしてみたんだ、気に入つてくれた?」

「当然、気に入つたとも。……ところで」

ヒロトは不思議そうな感じをして、私にこう聞いたの。

「今日のヒナタは、朝からいつもと氣分が良さそうに見える。何かあつたのか？」

氣分が良さそうだつて。ふふつ、確かにその通り。私はヒロトに笑顔でこたえたの。

「うん！ 今日はとつても良い夢が見れたから。……私とヒロトとの、結婚式の時の夢を」

「結婚式、か」

彼もそれを聞いて、懐かしそうな表情を浮かべる。

「ヒナタが夢に見た結婚式、どつちの方の結婚式だつたんだ？ 大人になつてからの正式な結婚式か、それとも……」

「ほら、学生の頃G B Nで一緒にした結婚式の方だよ。ヒロトが連れて来てくれた教会での——一人だけの結婚式。

……もちろん、それから大人になつた後の結婚式も大切な思い出だけだ

思い出すだけでも懐かしくて、幸せな気持ちになる。

私はヒロトと幼馴染で、それから恋人として学生の間過ごしてから……大人になつて正式に結婚、晴れて夫婦になつたんだ。

彼も会社員に勤めて働いてくれているけど、私も看護師として働いてるの。ヒロトは大丈夫って言つてたけど、元々医療関係の仕事がしたかつたのもあるし、これから貯金も多い方がいいもん。共働きだけど、家事も彼が手伝つてくれて助かつてているし、やつぱり私のヒーローなんだ——ヒロトは。

そんな彼の左手の薬指にも、私と同じ結婚指輪がきらりと輝くのが見える。それが見えて私はまた、嬉しくて微笑んでしまう。

「その時のG B Nでの思い出、俺もよく覚えている。デート中に見たウエディングドレスがきっかけで、しようと思つた結婚式。まだ学生なのに、自分でもよく頑張れたと思う。ドレスや指輪までも、用意までして。

もしかするとやり過ぎで、ヒナタに引かれたらどうしようかつて、

あの時は内心ドキドキしていた

「ふふふつ、そんな風に思つてたんだ。でも私はヒロトがああしてくれて、凄く嬉しかったんだよ」

「もちろん。あの時のヒナタが喜んでくれていたから、俺も良かつたと思っている。

それに二人だけの結婚式で誓つた事は、大切な事だから。これからもヒナタと一緒に幸せになりたいって……その思いは今でも同じだ」優しく話すヒロト。それから、私にこう続けたの。

「あのさ、俺はヒナタの事を幸せに——出来ているだろうか？」改めて気になるみたいな彼の言葉。

——そんなの、当然だよ——

私はにつこりと満面の笑顔で、答えたの。

「もちろんだよ！ 私はヒロトとこうして傍にいられて、幸せだから」これが心からの、私の気持ち。

ヒロトはそんな私を見つめて、にこっと微笑み返して。

「そうか——なら良かつた。ヒナタが幸せでいてくれるのなら」

朝から私とヒロト、二人で笑い合えるいつものこの日常。それがたまらなく私は……好きなの。

---

「じゃあ、行つて来るよ」

朝ごはんを食べて、支度を済ませたヒロトは仕事へと行こうと、玄関に出ていたの。

……彼とお別れするのは少し寂しいけど、でも仕事だから仕方ないよね。

それにヒロトは真っすぐ帰つて来てくれて、早い帰りが多いんだ。私も仕事の日もあるけど、それでも仕事帰りの夜や休みの日を合わせたりして、共働きでも二人で一緒に過ごす時間は多いの。

先週の休みには二人で温泉旅行にも行つて、温泉に浸かってリラックスも出来たり。……休みが一緒の時にはそう過ぐすのも、よくやっているんだ。

「うん！ ヒロトもお仕事を頑張つてね。それと、ね」

それに今日は、大切な日でもあるんだ。ヒロトも覚えてくれていたらいいけど。

だけどそんな心配は要らなかつたみたい。彼は当然と言つた感じで、答えてくれたの。

「もちろん。今日はヒナタとの結婚記念日だ、忘れてなんていないよ。いつもより早く仕事を終わらせて、君の元にすぐ戻つて来る」

今日は二人の……結婚記念日。そんな特別な日、ヒロトも覚えていてくれたんだ。

「良かつた、ちゃんと覚えてくれて！」

もう一周年なんだよね。ヒロトと、ずっと大切だつた人とこうして結ばれて。……とても幸せなの」

「俺もだ、ヒナタ。君は俺にとつても、今は何より大切な——」

彼は私の両肩にそつと手を置くと、顔を近づけて優しく、口づけをしてくれたの。

「……、これで元気も十分貰つた。きつと今日も、仕事も頑張れる」

お出かけ前のキス、今日はヒロトからして貰つちやつた。私もほんわりと暖かい気持ちで一杯で。

「ヒロトを元気に出来たかな？ なら私も嬉しいよ、今日は私は休みだから帰つて来るのを待つてるから。

結婚記念日だもん、帰つて来たらちよつとしたパーティーでも開こう？ いつもより豪華な夜ご飯を作つて、ケーキを用意して……私は待つてているね」

「パーティーか！ それならなおさら早く帰つて来ないとだな。

夜ご飯は、もし良かつたらハンバーグに、後はコロッケが食べたい。ヒナタが作つてくれるコロッケは特に絶品だから」

「うん！ ならハンバーグに、コロッケも沢山作つて待つてるからね。……ねえ、時間があつたらガンプラも作りたいな。昨日二人で作つ

たフリーダムガンダムも途中だったから、今日こそ完成させたいの」大人になつてからも、私たちがガンダムや……ガンプラが好きなのは変わらないの。ガンプラも時間を見つけて一緒に作つたりで。……もう自分一人でも作れるくらいにはなつたけど、やっぱりヒロトと二人で作るのが好きなんだ。

「分かつた。なら後でフリーダムガンダムの続きを作ろう。

それに、いつか……今はヒナタのお腹にいる、俺達の子どもと一緒にガンプラを作れたらいいな」

私は改めてどきつと、頬が熱くなつて赤くなるのを感じてしまう。実はね……まだ生まれてないけど私とヒロトの間には、子どもが出来たんだ。妊娠を知つたのは最近でお腹もまだ膨らんでいないけれど、でも数か月もしたら会えるんだ。とつても……楽しみで。「きっと、子どもが生まれて成長したら、色々と教えてあげられたらいいね。

ガンプラもだけど、ガンダム作品の事とかもたくさん。その時にはヒロトも頼れるお父さんとして……ね」

「お父さん、か。今からでも何だかこそばゆく思つてしまふな。ちゃんと立派な父親として、ちゃんとやつて行けるだろうか？」

そのうち私たちも、お父さんとお母さんに。まだ少し先の事だけどヒロトの心配も分かるし、私も良いお母さんになつてあげられるかなつて気になつたりもしちやう。

でも、だからこそ私は前向きに、こう言うんだ。

「やれるよ！——私たち一人なら」

ヒロトもそれを聞いて、和らいだ良い表情になつたの。

「ああ。……俺たちはこれからも、良い家庭を築いていこう」

それから、彼は急にはつとした表情に変わって、私にこう話した。

「——つと！」

話に夢中になつてしまつたな。俺は今度こそ仕事に行かないで、本当に遅れてしまうから

「あつ……つい話しそぎちやつたかも。引き留めちやつたみたいで、ごめんね」

「ううん、俺もヒナタと話していく楽しかったから。お仕事頑張つて来てね、それと——」

私は上半身をヒロトに近づけて、それに右手で軽く彼のネクタイを引いて引き寄せる。その左頬つぺたにキスをしたんだ。

それから彼ににこっと笑つて。

「行つてらっしゃいの——キス。今度は私から、したかつたから」まさか続けてされると思つてなかつたのかな。ヒロトはぼつと少し顔が赤くなつて、でも照れ笑いを見させてくれた。

「ふふつ、朝から二回もヒナタとキス出来るなんて……やっぱり今日は良い日だ」

「だつて、結婚記念日だからね。帰つて来たらもつと二人で一緒に過ごそう！」

彼は迷わずうんと頷いて、真つすぐ答えたの。

「もちろん。話の続きも後でしよう、俺も楽しみだ！

……じやあ行つて来る。ヒナタと記念日を過ごすために、いつも以上に仕事を頑張らないとな」

ヒロトは家を出て、仕事に行つたの。

彼の姿が見えなくなるまで見送つて、それから一人、満足そうに空を見上げた。

澄み渡つた——綺麗な青空。日差しも暖かく、心地がいいの。

——良い天氣、洗濯物を干すには丁度いいかも。毛布も一緒に干そ

うかな——

洗濯日和つて感じのいい天氣。それに干している間、買い物にも行こうかな？

冷蔵庫の中も少ないし、石鹼やシャンプーも減つていたから。それに……。

——結婚記念日のパーティーだつて準備もしないと。いつもより美味しい料理も、ヒロトのために作りたいから——

やつぱり良いな。ヒロトの一番傍にいられる、今の生活。

もちろん仕事もあるから、いつも一緒ではないけど。でも私たちは

ちゃんと繋がっているんだって確かに感じられるんだ。

「……ありがとう、ヒロト」

私はそう一人呟いたの。

傍にいてくれて——想ってくれて。ヒロトがあんなに愛してくれ  
る事が、今でも変わらずとても嬉しいの。

——幸せものだよね、私つて。だからこそヒロトも幸せにしたいん  
だ、それこそ一緒に――

だつて私はヒロトの、奥さんだもん。奥さんとして……これからも  
彼を支えてあげたいんだ。もちろんいつか母親として、これから生ま  
れる子どもの事も。

——だから私も頑張らないと。これからだもん、私たちは――  
私の心も、外の天気と同じように晴れ渡っているつて。  
何だかとつても――そんな感じなんだ！